

(6) 大内峠一里塚

会津領内を貫通する基本道路は、藩の初期においては白川街道、南山通り(下野街道)、越後街道、二本松街道、米沢街道の五本で、街道としての本格的な整備は寛永二十年(一六四三)の保科氏の会津入部後であると考えられます。

保科氏は、城下町並びに沿道の宿駅に対し、区間を定めてその管理と普請の役を課し、寛文七年(一六六七)四月一日からは一里を三十六町とするとともに街道筋には一里塚を築かせました。

この大内峠一里塚は、起点である会津城下「大町札の辻」から五里約二十kmの位置に当たり、街道の両側に「対」となっており、残っています。下野街道の一里塚は、その大部分が「対」で構築されたと考えられますが、現在ではそのほとんどが消失し、あるいは片側だけとなっています。「大内峠一里塚」やこれより一里、会津側に存在する「栃沢一里塚」のように、「対」で現存している箇所は希であり、県内でも貴重な文化遺産となっています。

街道に築かれた一里塚は、旅人にとって道のりを知る上での貴重な存在であり、荷役や駕籠の賃金を支払う上でも大変良い目安となったのです。

一里塚に植えられたとされる「榎」も、日差しの強い日には木陰をつくり、休息の場として旅人の疲れを癒したのではないでしょうか。

